

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 21 日現在

機関番号：32415

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25381320

研究課題名(和文) ASD児への養育者による日常的なコミュニケーション支援のための語用論的能力の解析

研究課題名(英文) The analysis of pragmatic abilities of ASD children, in order to make for daily support for their communication

研究代表者

伊藤 恵子 (ITO, Keiko)

十文字学園女子大学・人間生活学部・教授

研究者番号：80326991

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：ASD児への日常的なコミュニケーション支援を行うために、かれらの語用論的能力を検討した。研究の結果(1) ASD児は表出言語において情報を提供する構造や談話の語用論的な制約に対する感受性を定型発達(TD)児と同様に有していること、(2) ASD児、TD児ともに話者の発した言語的意味と発話意図の異同に関しては正しく理解していたものの、冗談と皮肉に関しては理解が困難なことがわかった。他方(3) ASD児は非言語情報の統合が困難である可能性が示唆された。以上の知見にASD児の養育者との情報交換から得た知見を加えることにより、ASD児への日常的なコミュニケーション支援を行うための具体的な情報を得た。

研究成果の概要(英文)：I investigated pragmatic abilities of children with autism spectrum disorder (ASD), in order to make for daily support for their communication. The results were that (1) ASD children have sensitivity to discourse-pragmatic constraints in language similar to typically developing (TD) children. (2) ASD children and TD children could distinguish between the meaning of words and the intention of speakers. But both children had difficulty to understand joke and sarcasm. Whereas (3) It was suggested that ASD children had difficulty to integrate non-linguistic pragmatic information. Based on these results in addition to finding I had from my intervention for ASD children and their caregivers, I obtained useful information to make for daily support for ASD children's communication.

研究分野：発達臨床心理学

キーワード：発達障害 語用論 養育者 日常的支援 コミュニケーション 自閉スペクトラム症

1. 研究開始当初の背景

(1) 自閉スペクトラム症(ASD)児への支援：ASD 児に対しては、ソーシャル・ストーリー (Gray, 1998) やソーシャルスキル・トレーニング (Howlin, 1999; Barnhill, 2002) などさまざまな支援が試みられ、一定の効果が報告されている。しかし、日常生活への般化に関するデータは少なく、十分な科学的検証に基づいた支援は必ずしも多いとはいえない (Rao, et al, 2008)。指導場面や検査結果の向上に限定された効果では、かれらの生活の質(QOL)の向上は望めない。とくに日常のコミュニケーションは、社会適応と密接な関連を有しているが、ASD 児におけるコミュニケーションは、語用論的能力に関して顕著な問題が見出されている (Wetherby & Prutting, 1984)。この語用論的能力に対して、Willcoxら (2000) は、5歳の自閉症児の会話分析を行い、語用論上の問題を特定し、それへの適切な応答を日常場面で指導したところ、問題を減少させることに成功した。日本においても、高橋 (2005) や大井ら (2004) などが同様の支援を実施し、日常会話での一定の成果を報告している。

(2) 語用論的能力：この ASD 児の語用論的能力の特異性は、多様で広範囲にわたる語用論の研究領域すべてにおいて生じるともいわれており (大井, 2004)、これらすべての領域を網羅して ASD 児の語用論的能力の特徴を実証的に分析することは困難である。語用論の各領域において、ASD 児の語用論的能力に関する精緻な分析を実施し、基礎的データを蓄積していくことが求められている。

(3) ASD 児の語用論的能力の特徴：伊藤 (2004, 2005, 2006, 2007, 2008) は、語用論の研究領域のひとつである直示 (deixis) のなかの指示詞に着目して ASD 児の語用論的能力の検討を実証的データに基づき行ってきた。その結果、対人志向性の乏しさ、独自の基準からの指示詞使い分け、非言語情報の無視などが見出された。これらから、言語獲得の基礎になる社会性 (対人的な能力) が ASD 児の語用論的能力に密接に関連していることが示唆された。Prizant and Wetherby (1985) が述べているように、ASD 児の言語コミュニケーションへの支援を行う際に、その場に即した適切な言語や話しことばの獲得といった表層的行動を扱うだけでは不十分であることが確認された。しかし、日常会話における ASD 児の語用論的能力に関しては、十分な検討が行われていない。

(4) 言語獲得要因に関する知見：子どもの言語獲得において、養育者の発話インプットの影響が確認されている (伊藤・大嶋, 2004a; 大嶋・Genesee・伊藤, 2004) とともに、かかわり手のかかわり方の相違が ASD 児のコミュニケーションに影響を及ぼすことが実証されている (伊藤・西村, 1999)。しかしこれらが、ASD 児の語用論的能力にどのような影響を与

えるかは明らかにされていない。

2. 研究の目的

本研究においては、ASD 児の生活の質(QOL)向上を目指した養育者によるコミュニケーション支援を行うために、日常会話におけるかれらの語用論的能力の特徴の把握とその関連要因の解明を行うことを目的とした。

3. 研究の方法

(1) ASD 児の動詞の項の省略と語彙化のパターンからみた語用論的能力に関する研究

英語のような項の省略を許さない言語においては、子どもの言語獲得においてみられる「空主語 (null subject) (主語を省略する発話) の現象に関して多くの議論がある (Nakayama, 1994)。この「空主語」の現象を引き起こす要因として、従来の研究では文法的要因と言語処理運用能力の限界といった2つの要因が主に検討されてきたが、いずれもこの現象を十分に説明することはできない (Allen, 2000)。

これらの立場とは異なる語用論的な要因から「空主語」の現象を説明しようとする立場の Clancy (1997) や Allen (2000) は、Du Bois (1987) の理論を用いて韓国語やイヌイット語における子どもの「空主語」現象の説明を行っている。Du Bois によれば、談話においては言語処理運用能力の負担を軽減するため、おとなでも一文につき一つの項しか語彙化しない傾向があること、項の担う情報の新旧によって語彙化されるかどうかが決定的なこと、しかも①動詞の項の格 (主語, 目的語), ②項の担う情報の新旧, ③談話において語彙化される項, の三つには一定の関係があることを見出した。そしてこれを「好みの項構造」 (Preferred Argument Structure : PAS) と呼んだ。この主張は、言語処理運用能力限界説のように文中の主語と目的語の位置によって一律に主語が目的語より省略されやすいという説明とは異なっており説得力がある。つまり、他動詞の主語は談話においてすでに述べられた旧情報を担うことが多く語彙化されにくく、他動詞の目的語と自動詞の主語は、他動詞の主語にくらべ新情報を担うことが多く、語彙化される傾向が強いというのである。

そこで、本研究では MLU で統一した定型発達 (typically developing : TD) 児との比較を通して、ASD 児にも「好みの項構造」が存在するか否かをみることにより、情報を提供する構造や談話の語用論的な特徴に対する ASD 児の感受性を検討することとした。その際、非言語情報の関与に関しても検討を行った。なぜならば、空項 (空主語や空目的語) が観察されたとしても、話者が指さしや視線によって、その対象を指示しているため、あえて主語や目的語を省略している場合が想定される

からである (Guerriero, Oshima-Takane, & Kuriyama, 2006)。

① **対象**: ASD 児 2 名: A1 児 (男児, CA:5;2, MLU:2.10, 総発話数:988, 全領域 DQ:91, 言語社会領域 DQ:123, 認知適応領域 DQ:75), A2 児 (女児, CA:6;1, MLU:3.06, 総発話数:274, 全領域 DQ:102, 言語社会領域 DQ:102, 認知適応領域 DQ:102)

TD 児 2 名: T1 児 (男児, CA:2;8, MLU:2.23, 総発話数:981), T2 児 (女児, CA:2;9, MLU:3.21, 発話数:832)

なお, 本研究を行うにあたり, 対象児の保護者に対して研究目的及び方法を説明し, 保護者から口頭もしくは書面で同意を得た。

② **観察場所及び場面設定**: 対象児の自宅及び公共施設の和室 (約 8 畳) において, 約 1 時間, デジタルビデオカメラによる録画及び録音を行った。場面の設定は, 室内での母親と対象児の自由遊びである。母親は, 「子どもと自由に遊んでください」と指示されただけで, 規制は何もされなかった。使用された玩具は, ままごとセット, めいぐるみ, 画用紙, 色鉛筆, 組み立て人形であった。

③ **データ作成方法**: 録画録音された映像録音をもとに, 言語研究のための国際的な幼児言語データ共有システムである CHILDES (Child Language Data Exchange System) の日本語版入力方式 (MacWhinney, 2000; Oshima-Takane, MacWhinney, Sirai, Miyata, & Naka, 1998) によって, 観察場面におけるすべての言語及び音声を文字化し, 発話データを作成した。この発話データは, 宮田・中 (1998) の考案した分かち書きガイドラインに従い, ヘボン式ローマ字で記載した。作成されたデータの記載内容の 2 割に関して, 2 名が, それぞれ独立に録画録音との照合を行った。その結果, 記載内容の一致率は, 99.1% であり, 不一致部分に関しては, この 2 名で協議のうえ, 記載内容を決定した。

④ **分析方法**: 言語発達の速さには個人差があり, 生活年齢は必ずしも言語発達のよい指標とはならない (綿巻, 2002) ため, Brown (1973) の考案した文法発達指標としての MLU による言語発達の時期ごとに, ASD 児と TD 児の比較を, 以下の 3 項目について行った。なお, MLU は発話数に対する形態素数の比率で, 発話の長さの平均を示し, 言語発達の水準を推定する指標として, 第一言語習得研究を中心に用いられている。形態素は, 言語において語を構成する意味を担った最小単位と考えられており, 本稿では, 例えば「ame ga ippai furu yo」のような分かち書きを行っており, この場合, 形態素数は 5 となる。MLU の算出方法は, 例えば発話数が 5, 形態素数が 9 の場合, $9 \div 5$ で MLU は 1.80 となる。(1) 項が担う情報の新旧, (2) 自動詞・他動詞の区別とその項の格 (主語・目的語), (3) 非言語情報を, Guerriero ら (2001) の開発した方式によりコーディングを行い, 各コードの頻度及びコードの各種組み合わせの頻度を

比較検討した。コーディングされたデータの 2 割に関して, 2 名が, それぞれ独立に録画録音を確認しながらコーディングし, すべてのコードについて照合し, 一致率を計算した。その結果, コーディングの一致率は, 85.7% であり, 不一致部分に関しては, この 2 名で協議のうえ, コードを決定した。なお, 分析項目 (1) 項が担う情報の新旧に関しては, 以下のように情報の新旧を判断した。コーディングしている主語もしくは目的語の含まれる発話から数えて, 20 発話以前からこの発話までに, その主語もしくは目的語が指示する対象についてすでに発話されている場合は, その項が旧情報を担っていると判断した。その際, その主語や目的語がたとえ省略されていたとしても, 前後の文脈から指示している対象が明らかな場合には, その項は旧情報と判断した。たとえば, 「リスがクルミを食べている」という文をコーディングする場合, 主語である「リス」がこの発話の 20 発話以前からこの発話までに発話されていれば, 主語は旧情報を担うと判断した。なお同時期に「クルミを食べている」という主語の省略された発話があったとしても, 前後の文脈から主語が「リス」ということが明確である場合も, 主語は旧情報を担うと判断した。目的語である「クルミ」に関しても同様に判断した。他方, その主語もしくは目的語がはじめて発話された場合のほか, すでに発話されたが, 20 発話より前である場合は, その項が新情報を担っていると判断した。また, 本稿において非言語情報ありとは, 発話時の以下のものを指す。①話者が対象に触ったり指さしたりしている場合, ②話者が対象を意識的にみつめている場合である。非言語情報なしとは, 発話時の以下のものを指す。①対象への話者の非言語情報が観察されない場合, ②話者が対象に視線を向けず, 対象に向かって動いたり近づいたりなどの話者の動作のみが観察された場合, ③話者が対象に視線を向けず, 聞き手だけが対象に触ったり, 指さしたり, 注目したりしている場合である。さらに, 録画面上で非言語情報の有無が確認できない場合は, カウントから除外した。

(2) 話し手の発話意図に関する非言語的情報の理解に関する研究

研究(1)の結果を受けて, 非言語情報処理に関する実験を実施した。これは日常場面に近い映像を通して, 非言語情報の異なる各言語的意味から, ASD 児が話者の発話意図をどのように理解しているかを調べるものであった。日常場面においては, 話者の発する言語的意味とその発話意図は必ずしも一致するとは限らない。話者の発話意図を適切に読み取るためには, 会話の文脈や話者の表情・プロソディーといった非言語的情報を統合して総合的に判断する必要がある。しかし, ASD 児は話者の発する言語的意味を字義通りに解釈

する傾向があり、会話の文脈を無視したり、情報の統合や利用の困難さを示したりすることが確認されている(伊藤, 2012)。本稿では、日常場面に近い映像を通して、非言語的情報の異なる各言語的意味から、ASD 児が話者の発話意図をどのように理解しているかを、TD 児との比較を通して調べた。

① **対象**: ASDと診断された小学1~6年男児16名、女児2名(平均年齢:9歳5ヵ月, SD:1.6)(平均FIQ(DQ):99.3, SD:15.96)と、小学1~6年(平均年齢:9.5歳, SD:1.39)の13名(男児:6名, 女児:7名)の定型発達(TD)児を対象とした。なお、本調査を行うにあたり、十文字学園女子大学・埼玉医科大学・東京電機大学の各研究倫理審査委員会の審査を経て、保護者と対象児に対し調査目的及び方法を説明し研究協力の同意を書面にて得た。

② **刺激音声**: 言語的意味が相手を賞賛する肯定的表現(いいね、きれいね、おきこうさんね、上手ね、静かね。)と言語的意味が相手を非難する否定的表現(だめね、汚いね、おばかさんね、下手ね、うるさいね。)の10語を選定した。息子役の男児に向かって、母親役の女性話者が発するこの10語と場面(肯定的、否定的)を組み合わせ、賞賛・皮肉・冗談・叱責の4つの発話意図を構成した。賞賛は、肯定的場面において笑顔で高いトーンで肯定的表現語を発した。皮肉は、否定的場面において眉間にしわを寄せ低いトーンで肯定的表現語を発した。冗談は、肯定的場面において笑顔で高いトーンで否定的表現語を発した。叱責は、否定的場面において眉間にしわを寄せ低いトーンで否定的表現語を発した。

③ **刺激映像**: まず、場面のビデオ映像がモニター画面上に提示され、続いて女性話者の表情が映し出されると同時に、場面に対応する刺激音声も提示された(計20試行)。

④ **実験手続き**: 個別に刺激映像を視聴後、同一モニターに以下の3つの質問(質問①お母さんは何を言いましたか?②お母さんの本当の気持ちは何ですか?③それはなぜですか?)が文字と男性音声によって提示され、対象児は個別にこれらの質問にことばもしくは指さしによって回答した。

(3) ASD 児への日常的なコミュニケーション支援に関する研究

養育者との定期的なカウンセリングの場において、日常コミュニケーションでのニーズを把握した。そのうえで、前述の研究結果から得られた知見に基づいた、ASD 児への日常的なコミュニケーション支援の方法を養育者に提示した。

4. 研究成果

(1) ASD 児の動詞の項の省略と語彙化のパターンからみた語用論的能力に関する研究

この研究の結果、以下のことが見出された。

① **自動詞の主語に関して**: 旧情報を担う自動詞の主語に関しては、ASD 児は、TD 児と同様に、約80%が空主語化していたのに対し、新情報を担う場合は、ほとんど空主語化が認められなかった。この結果は、Clancy (1997) や Allen (2000) の主張のように、子どもがランダムに項を省略したり、語彙化したりしているのではなく、談話における情報の新旧というような語用論的手がかりに従って省略や語彙化を行っている可能性が示唆された。

しかも、新情報を担う自動詞の主語に関しては、ASD 児は2名とも語彙化して、代名詞化を全くしていない。これに対し、TD 児の1名は語彙化せず、代名詞化している。このことは、新情報を担う場合は、語彙化される傾向が強いという Du Bois (1987) の主張に、ASD 児の結果のほうが合致していた。Du Bois によれば、代名詞は、空主語と同様に対象を特定しないため、新情報ではなく、旧情報で観察されることになっている。しかしこれは、空主語を許さない英語圏の原則であり、日本語においては、旧情報においても、代名詞化よりも空主語化が多く観察されることが報告されている(Guerrier et al., 2006; Guerrier et al., 2009)。今回の結果で、新情報で語彙化をせずに代名詞化しているのは1名のTD 児だけで、しかも1回しか観察されていないため、この結果から、ASD 児に比べTD 児の方が Du Bois (1987) の主張に合致しなかったと結論することはできない。今後、新情報について発話する機会がもっと多くなるような場面設定をして、果たしてASD 児とTD 児に違いがないのか検討していくことが必要である。

② **他動詞の主語に関して**: ASD 児、TD 児を問わず対象児4名ともに、新情報は1度も観察されず、すべて旧情報を担っており、そのほとんどが空主語化していた。この結果は、他動詞の主語は談話においてすでに述べられた旧情報を担うことが多く、語彙化されにくいという Du Bois の主張に沿っていた。

③ **他動詞の目的語に関して**: ASD 児は、TD 児と同様に、旧情報を担う場合は、過半数が空目的語化していたのに対し、新情報を担う場合は、1名のTD 児を除いて、空目的語化は少なかった。

これらの結果から、他動詞の主語は談話においてすでに述べられた旧情報を担うことが多く語彙化されにくく、他動詞の目的語と自動詞の主語は、他動詞の主語に比べ新情報を担うことが多く、語彙化される傾向が強いという Du Bois (1987) の「好みの項構造」が、日本のASD 児においても、日本のTD 児とほぼ同様に観察された。このことから、情報を提供する構造や談話の語用論的な特徴に対して、言語面においてはASD 児もTD 児と同様に感受性を有していると推測された。そこでさらに、発話に際し、非言語情報を伴ったか否かを、空項化、代名詞化、語彙化、それぞ

れの場合で検討した。

④ 発話に伴う非言語情報に関して：ASD 児の非言語情報の出現率が、TD 児に比べ、語彙化に際して有意に高いのか、空項化に際して有意に高いのかは、MLU の段階によって異なっていた。このことが、個人差によるものなのか、MLU の段階による ASD 児と TD 児の差なのかは、検討した事例が少ないため、特定はできない。しかし、代名詞化に際しては、MLU の段階を問わず、ASD 児は TD 児に比べ、非言語情報の出現率が有意に低かった。なお、日本語の代名詞化の場合、人称代名詞はほとんど使われず、本稿においても代名詞はすべて指示代名詞であった。代名詞化に際しては、通常、非言語情報により対象を特定し易くする。ASD 児が TD 児に比べ、非言語情報を対象特定のために有効に活用しないというこの結果は、伊藤 (2006, 2008) や伊藤・田中 (2006, 2009) の報告とも一致する。

伊藤 (2006, 2008) によれば、通常、指示詞は視線や指さしなどの非言語情報を伴って発せられることが多いが、指示詞表出に際し、ASD 児は TD 児に比べ、非言語情報を伴うことが有意に少なかった。同じく伊藤ら (2006) によると、非言語情報を伴わずに指示詞 (こっち・そっち・あっち) の言語指示のみで指示対象を特定する指示詞の理解実験を行ったところ、TD 児・者が指示対象の特定に戸惑いを示したのに対し、ASD 児は躊躇なく指示対象を特定する者が多かった。この指示詞の理解実験にさらに、視線や指さしといった非言語情報による指示対象を特定する手がかりを与えると、TD 者は視線を有力な手がかりとして指示対象を正確に特定することができた (伊藤ほか, 2009)。しかし、ASD 児の約半数は視線を手がかりとして活用することができず、指示対象特定に失敗し、指さしによっても指示対象を正確に特定できない者もいた。この結果は、非言語情報の指示対象を的確に特定できないという理由のほか、話者の発する非言語情報にその話者のコミュニケーション意図が込められているということを理解していないという二つの理由が想定できたと伊藤らは報告している。

大井 (2002) によれば、非言語情報処理の失敗に起因する語用論的能力の問題は、一次的には注意、知覚、記憶、感情、他者理解の障害を基盤として生じ、その典型的で極端なケースが ASD 児において認められると述べている。本稿の結果は、事例数が少なく、一般化に際しては限界があるものの、言語面に着目する限りにおいては、ASD 児も TD 児と同様に、情報を提供する構造や談話の語用論的な特徴に対して、感受性を有していることが推測された。このことは、「普通の会話」や「一見正しく見える伝達行動」(大井, 2002) と見なされ、ASD 児のコミュニケーションの問題を過小評価してしまう危険性をはらんでいる。しかし、本稿の結果は、ASD 児の非言語情報の活用に関しては、TD 児との差異が見出され

た。ASD 児においては、幼いころから、人に視線を向けない、叙述の指さしをしないなどの対人的なかかわりに対して注意が向きにくいことが、一貫して見出されている。この対人的なかかわりのなかでみられる注意の希薄さは、ASD 児の社会的発達的基础となる経験を奪い、社会化のプロセスを妨げる可能性が指摘されており (Dawson, Meltzoff, Osterling, Rinaldi, & Brown, 1998), 言語発達においても大きな影響を与えている (Tager-Flusberg, 1994; 綿巻, 1997)。このことから、語用論的能力においてその特異性を有する ASD 児のコミュニケーション能力の発達を支援する方法を考えるうえで、非言語情報の処理に関するさらなる検討が必要と思われた。

(2) 話し手の発話意図に関する非言語的情報の理解に関する研究

この研究の結果、以下のことが見出された。

① 言語的意味と発話意図の異同：質問②の回答から、女性話者の発した言語的意味と話者の発話意図の異同をどの程度理解しているかをみた結果が図 1 である。発達 (ASD 群・TD 群) × 状況 (言語的意味の肯定表現と一致した発話意図 (肯定一致)・不一致の発話意図 (肯定不一致)・言語的意味の否定表現と一致した発話意図 (否定一致)・不一致の発話意図 (否定不一致)) を独立変数とし、正答数を従属変数とした混合計画の二要因分散分析を行った。その結果、発達 ($F(1, 29) = 2.19, n.s.$), 状況 ($F(3, 87) = 1.21, n.s.$), 及び発達と状況の交互作用 ($F(3, 87) = 0.15, n.s.$), すべてに有意な差はみられず、ASD 児、TD 児とも正しい回答が多かった。

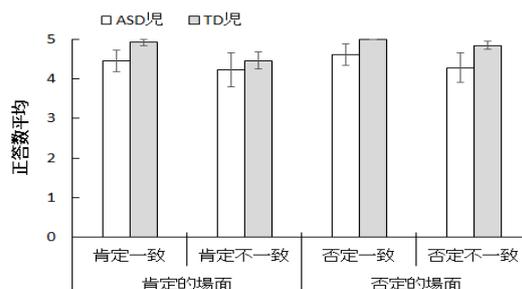


図 1 言語的意味と発話意図の異同の正答数 (エラーバーは、標準誤差)

② 発話意図の理解：質問③から得られた発話意図の理解の正答数の平均を図 2 に示した。

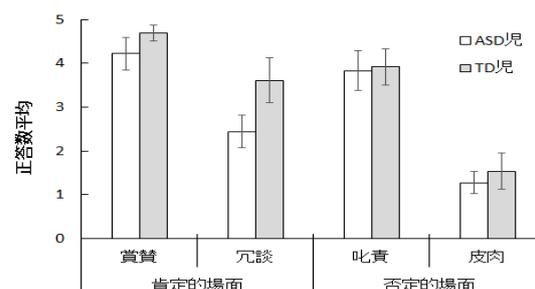


図 2 発話意図の正答数 (エラーバーは、標準誤差)

発達(ASD 群・TD 群)×発話意図(賞賛・叱責・皮肉・冗談)を独立変数とし、正答数を従属変数とした混合計画の二要因分散分析を行った。その結果、発達($F(1, 29)=2.49, n.s.$)、及び発達と発話意図の交互作用($F(3, 87)=0.83, n.s.$)に有意な差はみられなかった。だが、発話意図には主効果がみられた($F(3, 87)=25.93, p<.001$)。そのため、Bonferroni 法により、平均値間の差の検定をした結果、賞賛($M=4.42, SD=1.26$)と叱責($M=3.87, SD=1.26$)、及び叱責と冗談($M=2.94, SD=1.83$)では、有意差は認められなかった。しかし、賞賛と冗談($p<.01$)及び、賞賛と皮肉($M=1.39, SD=1.67, p<.001$)においては有意差がみられた。また、叱責は皮肉とのみ有意差がみられ($p<.001$)冗談と皮肉にも有意差がみられた($p<.01$)。

以上の結果から、ASD 児、TD 児ともに、話者の発した言語的意味とその発話意図の異同には気づいているものの、言語的意味と話者の発話意図が不一致であった場合、それが冗談なのか、皮肉なのかということの理解が困難であるということが分かった。今回の実験結果においては、ASD 児・TD 児間に差は見出されなかった。

(3) ASD 児への日常的なコミュニケーション支援に関する研究

養育者との定期的なカウンセリングの場における日常コミュニケーションでのニーズを把握した。その結果、冗談や皮肉のように、言語的意味と話者の発話意図の不一致場面で対人トラブルが多いことが分かった。研究(1)及び(2)の結果から、ASD 児が非言語情報から話者の発話意図を適切に推測することが困難であるとの示唆が得られた。この知見に基づいた、ASD 児への日常的なコミュニケーション支援の方法を養育者に提示し、実施可能な、養育者による ASD 児への日常的なコミュニケーション支援を実施してもらった。しかし、研究(2)の結果においては、ASD 児・TD 児間に差は見出されず、話者の非言語的情報のどこに着目して、話者の発話意図を解釈していたかをより詳細に検討していくことが必要と思われる。また、両者の発達的变化も検討が必要といえた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1 件)

① 伊藤恵子・大嶋百合子：自閉症スペクトラム障害児の動詞の項の省略と語彙化のパターンからみた語用論的能力. 特殊教育学研究, 52(2), 75-84. (2014) 査読有.

[学会発表] (計 7 件)

- ① 伊藤恵子・安田哲也・高田 栄子・小林春美：話し手の発話意図に関する非言語的情報の理解(4) -自閉スペクトラム症児と定型発達児との比較-. 日本特殊教育学会第 54 回大会 (201609)新潟大学 (新潟県, 新潟市).
- ② 安田 哲也・伊藤 恵子・高田栄子・小林春美：発話意図推測に関する文脈の手がかりと言語の手がかりの理解. 日本認知科学会第 33 回大会 (201609)北海道大学 (北海道, 札幌市).
- ③ 安田 哲也・伊藤 恵子・三浦 葵・高田栄子・小林春美：話し手の発話意図に関する非言語的情報の理解(3). 日本発達心理学会第 27 回大会 (20160429)北海道大学 (北海道, 札幌市).
- ④ 伊藤恵子・安田哲也・高田 栄子・小林春美：話し手の発話意図に関する非言語的情報の理解(1)-自閉スペクトラム症児の場合-. 日本発達心理学会第 26 回大会 (20150320)東京大学 (東京都, 文京区).
- ⑤ 安田 哲也・伊藤 恵子・富山 奈保子・檜山 愛・小林 春美：話し手の発話意図に関する非言語的情報の理解(2)-女子大学生の場合-. 日本発達心理学会第 26 回大会 (20150320)東京大学 (東京都, 文京区).
- ⑥ 伊藤恵子:自閉症スペクトラム障害児の非慣用的言語行動. 日本特殊教育学会第 52 回大会 (20140920)高知大学 (高知県, 高知市).
- ⑦ 伊藤恵子・安田哲也・小林春美：自閉症スペクトラム障害 (ASD) 児の絵本理解(2) 登場人物の心情理解と各種能力との検討. 日本発達心理学会第 25 回大会. (20140322)京都大学 (京都府, 京都市).

[図書] (計 1 件)

① 伊藤恵子：教育・保育・子育て支援のための発達臨床心理学. 文化書房博文社, (2015) 244.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

伊藤 恵子 (ITO Keiko)

十文字学園女子大学・人間生活学部・教授

研究者番号：80326991